

2025年5月4日 第二礼拝

説教題「石が叫ぶ／石は聞いている」ルカ福音書19章37～40節

主任牧師 加藤 誠

「言っておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」(ルカ19:40)

今年の受難節に皆さんに質問したことを覚えておられるでしょうか。「なぜイエスさまは十字架にかかれたのか…と小学生に質問されたら何と答えますか?」。イースターは終わりましたが、今もこの問いを考え続けています。きっと答えは一つではなく、これからも考え続けることでしょうが、わたしはこんなふうに考えました。

主イエスの前には十字架の道だけでなく、いろいろな選択肢があったはず。例えば自分を憎悪する指導者たちのいるエルサレムには行かずにそのままガリラヤに居続ける選択肢もあった。そうしたらどうなっていたらろうか。奇跡的な力を持つ主イエスの評判はますます高まり、病気を癒してほしいと多くの人が押し寄せたことだろう。しかし、奇跡的な癒しを求める信仰は自分の願い中心の信仰。願いが叶えられたら「すごい!」、でも叶えられないと「なんだ!」で終わる。ご利益だけを求めて自分は変わろうとしない信仰。また、そういう奇跡的な力を持つ主イエスのもとにはどういう弟子集団が生まれていったらろうか。弟子たちの間でも奇跡的な力を持つ者ほどリーダーとして立てられ、お互いに自分の力や有能さを競い合い、足を引っ張り合う弟子集団になっていったのではないか。

それに対して、主イエスは人間にとって一番大切なもの、一番幸せなこと。それは力や有能さを求めて「上へ上へと登って行く道」ではなく、神の前に小さく子どもになって「下へ下へと降っていく道」であることを示そうとされたのではないか。どんな時も、どんな人にも注がれている神さまの愛を、うれしく感謝して受け取る子どもになる。競い合うのではなく、分かち合う。足を引っ張り合うのではなく、支え合う。「下へ下へと下っていく道」にこそ、幸せがあることを教えてくださろうとしたのではないか。

それゆえに主イエスご自身、人びとの間で「栄光のメシア」としてほめたたえられる道ではなく、神の御旨に従って「僕として仕える道」を選ばれたのでした。もしも主イエスが自分がほめたたえられる「栄光のメシアの道」を選ばれていたなら、大井教会はここにありません。主イエスが「十字架の苦難の道」を選ばれた故に私たちは今日ここに「キリストのからだ」として建てられているのです。

そのようなことを考えていると、今朝のエルサレム入城の場面では、弟子たちが「自分の見たあらゆる奇跡のゆえに」主イエスを「王」のように見立てて神を賛美していますが、果たして主イエスはロバの子の背中に乗りながら、この賛美をどのように聞

かかれたらどうかと考えさせられます。「奇跡的力をふるう王」ではなく「十字架に自らをささげる僕」として、また「力による平和」ではなく「仕える平和」を実現するために自分は来たのに。未だに自分を理解できない的外れな弟子たちにどれほど深い失望を覚えられていたことでしょうか。しかも数日後には弟子たちが自分を見捨てて逃げてしまう姿も主イエスには見えていたことでしょうか。にもかかわらず、その弟子たちの賛美を黙って受けていかれる姿に、主イエスの深い愛と祈りを示されます。

一方で、この弟子たちの賛美を別の意味で苦々しい思いで聞いた人たちがいました。ファリサイ派の人たちです。彼らは、聖書を学んでいない無教養な弟子たちが、イエスを「王」に見立てて賛美していることに腹が立って仕方なかったようです。律法が大切にす安息日を軽んじるイエスのような男が神の子であるわけがない。仮にも自分が聖書の教師だと言いうなら、神を冒瀆する賛美をしている弟子たちをきちんと「叱り飛ばすべきだ！」と考えたファリサイ派の人々は主イエスに対して「愚かで無教養なお前さんの弟子たちの口を閉じさせろ！」と迫ったのです。

すると主イエスはこう応じられました。「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす」。「石が叫ぶ」とはどういうことでしょうか。ふつう石は叫びません。しかし聖書では、石はちゃんと聞いています（ヨシュア記 24：27）。人の言葉も神の言葉も、石は人間よりもしっかりと聞いています。そしてもし人間が神さまに対する約束を破ったりすると、石がその間違いを示すのです。また、聖書において石は歴史の証人としての役割を果たします。権力者たちは自分に都合よく歴史を捻じ曲げていくけれども、しかし石はそのような悪を見逃さないのです。

また私たち人間が神をあなどり「誰も見ていないだろう」と言って悪事に手を染めるとき、石は神に向かって叫びます（創世記 4：10 参照）。「石の叫び」は、不当に声を圧殺された人びとの叫びや告発であり、声なき声であり、権力者がその声をもみ消そうとしても、神がしっかりと聞いておられる叫び。それが「石の叫び」なのです。

だとするならば、ここで問われているのはファリサイ派の人たちだけでなく、わたし自身のことだと示されます。神へのあなどりがわたしの中にあります。「誰も見ていない」という誘惑に弱い自分がいます。また、力の弱い者の声を力で抑え込もうとするところがあります。そのわたしに主イエスは十字架を指し示し、十字架から生まれる平和こそが私たちを救う道であることを教えてください。

「石の叫び」は、私たち人間の弱さを知っている叫びであり、私たちの狡さを見逃さない厳しい叫びです。同時に、どんな時も、どんなに悪い者も、十字架の愛を注ぎ続ける神の真実の愛を語り続けるのが「石の叫び」です。この「石の叫び」を聞きながら、主イエスの十字架のもとに集められ、小さな者が互いに結びつけられ、教会としてここに建てられていることを深く心に刻みたいのです。